

別 刷

疎開研究の地平を拓く

－ 戦争体験としての「人口疎開」に関する学際的研究のために －

李 承 俊

『日本語文学』第73輯 日本語文学會

2016. 5

www.trijapan.co.kr

疎開研究の地平を拓く*

－ 戦争体験としての「人口疎開」に関する学際的研究のために －

李承俊**

戦争体験としての疎開体験を考える際には主に1944年夏、国民学校3-6年を対象に実施された学童集団疎開の歴史が想定されがちである。戦時期の国家政策として立案・実施された学童集団疎開であったが、防空体制整備の一貫として考案された疎開政策において肝心だったのは国家としての戦争体制維持という目的の達成であった。軍需工場の地方移転のための建物疎開が急遽実施されたのはそのためであり、そのような産業の移転に伴う人員の移転として合わせて考えなければならなかったのが「人口疎開」であった。

戦争体験としての「人口疎開」を学問的に取り上げるためには、学童集団疎開史研究の成果を踏まえ、近年の建物疎開研究などの成果を積極的に受け入れ、両方で提出された課題をめぐる様々な層を手探りしていかなければならない。それは、学童集団疎開を含めて戦時期の人々の移動としての疎開を、その体験が語られるようになった戦後日本社会という論点と融合させながら考察することを要求する。複眼的な視点からのアプローチ、学際的な視座による考察が必要である。「内向の世代」から高度経済成長期まで、様々な論点の間を横断する視座を駆使すること、本稿はそのための第一歩を提示したものである。

キーワード：疎開、戦争体験、総力戦、内向の世代、高度経済成長期
(소개, 전쟁 체험, 총력전, 내향의 세대, 고도경제성장기)

1. 耳なれない言葉、「疎開」

語句「疎開」を『日本国語大辞典』(以下、『日国大』)から引いてみると、以下のように定義されている。

* 本稿は日本学術振興会科学研究費助成金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。

** 名古屋大学大学院博士後期課程、leeseungjun7137@gmail.com

- ①とどこおりに通じること。開き通じること。
 ②軍隊で、敵の砲弾からの危害を少なくするため、分隊、小隊、中隊などが相互の距離間隔を開くこと。
 ③空襲、火災などの被害を少なくするため、都市などに密集している建造物や住民を分散すること。

『日国大』には、大正から昭和初期にかけては②の軍隊用語として定着していたが、太平洋戦争が始まると③の意で一般社会でも用いられるようになったと書かれている¹⁾。だが、②の意としての疎開という言葉は、自然に③の意に転用されてはいなかったようだ。

宇野浩二は『思ひ川』で1944年と1945年頃に関して『「疎開」といふ、これも、妙な、耳なれない、これまでなかった、言葉が云いふらされた²⁾と書いている。永井荷風は『(欄外朱書)疎開と云ふ新語流行す民家取払いのとなり³⁾と書いている。疎開という語句に対して宇野浩二、永井荷風は、「耳なれない、これまでなかった」「新語」が「流行」していたというふうに認識していた。しかし、二人が明治生まれだったために、流行に遅れて「新語」に鈍かったわけではない。

自らの学童集団疎開の体験を題材とした小説『冬の神話』(講談社、1966)を執筆した小林信彦は、自伝的エッセーで上記の永井荷風言葉に言及し、「それは即(民家取り払い)のことではないのだが、荷風をふくめて多くの国民には(疎開)が何のことかまだわからなかったのではないか。少年だったぼくも、初めはぴんとこなかったように記憶する⁴⁾と回想している。1940年代初期に「疎開」は、明治生まれの大人世代だけでなく昭和生まれの少国民世代にとっても「ぴんとこなかった」のだ。しかし、「疎開」という単語は永井荷風の言っているように「新語」としての造語であったわけではない。『日国大』を参照すれば「明治時代から見える」語句であったからである。「新語」のように感

1) 日本国語大辞典第二版編集委員会編(2001)『日本国語大辞典第二版 第8巻』小学館、「疎開」項目参照、pp.354-355。
 2) 宇野浩二(1972)『宇野浩二全集 第8巻』中央公論社、p.342。
 3) 永井荷風(1963)『荷風全集 第23巻』岩波書店、p.419。
 4) 小林信彦(1995)『一少年の見た(聖戦)』筑摩書房、p.105。

じられたのは疎開という言葉の記号表現ではなく、記号内容に起因していたのである。だとすれば、どういう記号内容として「云いふらされた」のかを考えねばならない。そこに疎開という言葉が「耳なれない」「新語」として認識されていた理由があるだろう。

疎開を英訳するとevacuationになる。evacuationをより一般的な日本語に訳すと避難になるが、避難という語句は「難を避ける」というふうに意味の分節ができ、同じく疎開という語句は「疎らに開く」というふうに分節できる。防空対策の一環として、政府により積極的に推進されたのが疎開政策であったが、〈表1〉は学童集団疎開政策の実施過程をまとめたものである。閣議決定・通牒の推移から見られるよう、政府はevacuation政策の名称に「疎開」という語を当てはめた。空襲の危険から国民を保護するという趣旨をもって実施されたものが、避難ではなく疎開という「新語」で呼ばれていたのは、政府における閣議決定・通牒において疎開という言葉が選択され、それがメディアなどを通じて伝播されたからであろう。言い換えれば、避難という単語が政府の推進しようとする政策の趣旨に合っていなかった、ということにもなる。「難を避ける」のでなく「疎らに開く」ための政策であったのだ⁵⁾。

〈表 1〉学童集団疎開実施過程⁶⁾

日時	決定・通牒	内容	備考
1943 10/25	(閣議決定) 重要都市人口疎開に 対する当面の啓発宣 伝方針	人口疎開は全国の戦 闘配備、重要都市防 衛体制強化に貢献す ることを周知させる	人口疎開という言葉 を用いた最初の公文 書

5) 1939年3月19日から4月6日まで東京上野の松坂屋デパートで開催された「東京防空展覧会」のためにデパートを飾ったパネルのタイトルは「原則として避難はするな」であった。逸見勝亮(1998)『学童集団疎開史—子どもたちの戦闘配置』大月書店、pp.19-20。
 6) 山中恒(1979)『ボクラ少国民第四部—欲シガリマセン勝ツマデハ』辺境社、pp.255-558、星田言(1994)『学童集団疎開の研究』近代文芸社、pp.5-265、逸見勝亮(1998)前掲書、pp.5-288などを参照して筆者が作成。

12/21	(閣議決定) 都市疎開実施要綱	建物疎開を中心に、それに付随した人口疎開を実施。人口疎開は原則として勧奨による	疎開実施により家族主義の精神にもとらないように指導
1944 3/3	(閣議決定) 一般疎開促進要綱 帝都疎開促進要綱	一般疎開の実施を強度に促進する	人口疎開政策の重点は「老幼婦女子」の疎開
3/9	(次官会議決定) 京浜地域人員疎開の措置要領	甲:建物、施設疎開にともなう者 乙:防空活動に支障となる惧れのある老人 幼児や保護を必要とするもの、特に国民学校初等科児童の疎開 丙:甲、乙以外	学童集団疎開についての政府の最初の言及
6/30	(閣議決定) 学童疎開促進要綱	学童疎開は縁故疎開を原則とし、縁故疎開が困難な児童(3-6学年)は勧奨による集団疎開を1年間実施する	東京、横浜、横須賀、大阪、神戸、名古屋、川崎、尼崎、小倉、門司、戸畑、若松、八幡など13都市、略40万人
7/10	(防空総本部通牒) 帝都学童集団疎開実施細目	区長・学校長を通じて適切な方法で集団疎開の趣旨を児童の保護者に徹底し、自発的申し出を指導勧奨	父兄・教職員・児童・受け入れ側官民に対して集団疎開の本義を徹底するために特別の措置をとる
1945 1/12	(閣議決定) 昭和二十年度学童集団疎開継続に関する	学童集団疎開実施期間を1年間延長する	

3/9	(閣議決定) 学童疎開強化要綱	徹底した疎開を実施し、1・2学年についても縁故疎開を強力に勧奨し、父母の希望があれば集団疎開に参加させる。縁故疎開の出来ない3-6学年は全員集団疎開に参加させる。	京都、広島、鶴舞、呉追加指定
9/19	(東京都教育局通牒) 集団疎開学童の一部復帰に関する件	1946年3月まで維持するが、食糧・施設などの関係上越冬困難なものは帰還を認める	ほとんどは1945年11月中引揚げ、46年3月末残余児童引揚げ。

永井荷風が「新語」を感じてから約三ヶ月後、1944年3月の「一般疎開促進要綱」「帝都疎開促進要綱」が決定された時期になると、疎開政策は「促進」しなければならないほどの急務になっていた。1944年6月30日に「学童疎開促進要綱」が閣議決定され、わずか10日後に「帝都学童集団疎開実施細目」が通牒された点から、学童集団疎開政策をどれほど緊迫した状況下で「促進」していたかが読み取れる。それは、「今回の疎開は戦局の急迫に伴って急遽断行されたものであり、且つわが国教育にとっては未曾有の経験でもあるので、之に対する充分の準備整はずして、直ちにその実践場面に突入せざるを得なかつた実情である」⁷⁾という記述からも確認できるだろう。

以上のように「急迫に伴って急遽断行された」学童集団疎開は、アジア・太平洋戦争における子供の戦争体験としてその重要度が認められてきた。学童集団疎開に関する歴史学・社会学の研究は続けられてき

7) 「疎開学童の教育指針」 日本教育会出版部、1944年11月、pp.1-2. 引用は全国疎開学童連絡協議会編(1994)「学童疎開の記録4 資料で語る学童疎開(2)」 大空社、pp.9-10.

ている。その総決算としては1994年に刊行された『学童疎開の記録』(全5巻、大空社)が取り上げられる。これは研究論文から当時の新聞記事、引率教員の日誌、疎開児童の日記や父母との手紙、受け入れ側の手記など、学童集団疎開を考える上で欠かせないものを総網羅したものである。このような成果によって戦争体験としての学童集団疎開は銃後の戦争体験を考える上での論点としての位置を確保することができた。しかし、それとは裏腹に、学童集団疎開をも包括する問題としての「人口疎開」、というものに関する議論が見送られてきたという点も指摘せねばならない。

2. 学童集団疎開史研究の落とし穴

近年になり、川口朋子『建物疎開と都市防空—「非戦災都市」京都の戦中・戦後』や安岡健一『「他者」たちの農業史—在日朝鮮人・疎開者・開拓農民・海外移民』(両方とも京都大学学術出版会、2014)など、京都を中心としたものではあるものの学童集団疎開にとどまらず建物疎開およびそれに伴う人員疎開、あるいは疎開という事態そのものまで議論の射程を広げた研究成果が続々と出されている。

川口明子は、研究領域としての建物疎開をめぐる歴史学と建築学との相反する立場を指摘している。つまり、歴史学的な観点からすれば、空襲で国土が焦土と化してしまったという事実に基づき失敗と判断された防空政策としての建物疎開は、それゆえに、研究対象から外されることとなった。その反面、建築学的な観点からすれば、都市計画研究分野において建物疎開跡地と戦後復興事業との関連から、戦後の都市構造の解明に役立つものとして注目されてきた、と述べている。疎開研究とはいかなる課題かという問いに関して川口明子は以下のように記している。

つまり、建物疎開の実態解明は、その執行時期や事業の性格により、特定の学問分野の方法論のみでは分析し難い研究課題な

のである。総力戦体制における国民動員という歴史学的観点から、同時に都市空間の変容という建築や都市計画の観点から、学際的アプローチが求められる課題と言える⁸⁾。

以上の引用文は「建物疎開の実態解明」という研究課題において要求される学際的アプローチについて述べたものであるが、これは建物疎開のみに収斂される問題であろうか。〈表1〉「(閣議決定)都市疎開実施要綱」の内容欄にまとめられたように、都市の防空体制強化をはかるものとしての疎開政策の大原則は建物疎開を中心としながら、それに随伴する人口疎開も勸奨、というような形であった。この点に関しては、『東京都戦災志』における戦時期疎開政策の細部項目に関する記録も見られる。疎開政策説明の第1項目は建物疎開で予算6億4千万円、「これは疎開政策の中で最も重点をおいて実施されたもの」であったと記されているのである。このような建物疎開に随伴する人口疎開を含める「人員疎開」のための予算は5千12万円と記されているし、「移転者応急措置」「物資疎開」に続く第4項目として設定されていた⁹⁾。

人口疎開研究における学童集団疎開の比重については上に述べたが、実は人口疎開において学童集団疎開が最優先に位置されていたわけでもなかった。それは、〈表1〉「(次官会議決定)京浜地域人員疎開の措置要領」における疎開該当者の区分から確認できる。建物疎開に随伴する移動としての甲の次に、「老幼者及用保護者、特に学童の転出」としての乙が想定されていたのである。しかも、この段階では「ここでの学童疎開は縁故疎開先への転出で学童の集団疎開は依然考慮中」¹⁰⁾と記されていたのも確認できる。人口疎開においても学童集団疎開は最優先として考えられていたわけではないのである。人員疎開研究において学童集団疎開が中心となって行われてきた研究史そのものへの再考が必要なのだ。

8) 川口朋子(2014) 前掲書、p.7.

9) 東京都編(2005)「(復刊版)東京都戦災誌」明元社、p.177.

10) 東京都編(2005) 前掲書、p.210.

人口疎開において国家施策として独立して行われた点、学校ごとの移動であったために親戚に頼って個人単位あるいは家族単位で移住する縁故疎開に比べて移動人口推移の把握などが容易であった点、関連行政資料や疎開児童・父母・引率教員・寮母・受け入れ側の人員などによる記録・証言などが1950年代になってから堰を切ったように公開された点¹¹⁾、などの要素が連動し、歴史学における学童集団疎開研究が可能となる要因が整備されてきたと言える。このような学童集団疎開史研究の好例を、逸見勝亮(1998)に見ることができるだろう。副題目が示している通り、学童集団疎開は「子供の戦闘配置」¹²⁾であったのであり、その体験はすなわち子供の戦争体験であったのだ。

しかし、学童集団疎開に関する評価のすべてが逸見勝亮(1998)における結論におさまるものではない。地方教育史における記述を拾って比較してみると、「実際の疎開生活は厳しかった。(中略)二十四時間の軍隊式錬成教育が形式的に充実すればするほど、さまざまな歪みや苦悩をもたらさざるを得なかった。それは、子どもの情緒不安、陰湿ないじめとして現れてくるが多かった」¹³⁾という記述から、「疎開先での学童の生活は一応順調であった。例えば千種区松軒国民学校の八〇名は西加茂郡高橋村に疎開生活実情懇談会を開き、積極的協力を約束し、蔬菜や燃料などを優先的に確保し、学校でも朝礼から夕会まで同一行動をとり、疎开学童と疎開先国民学校児童との融和がはかられた」¹⁴⁾という記述まで、まるで正反対の評価

を下しているようだ。記述の外見だけ見ても、「厳しかった」と述べている『東京都教育史』には歴史の実例が紹介されてはおらず、「順調であった」と述べている『愛知県教育史』のほうは「松軒国民学校」「西加茂郡高橋村」などの実名を列挙しながら、より客観的な根拠を提示している。ことわっておくが、疎開政策推進における模範であった東京を中心に考察された逸見勝亮(1998)において扱われている学童集団疎開の歴史は、「順調」で「融和がはかられた」疎開生活などではなく、「子どもの情緒不安、陰湿ないじめ」のような「厳しかった」疎開生活のことである。だとしたら、東京では「厳しかった」のに対して愛知県では「順調」であったという、各々地域における差が現れていると受け止めておけば済むものなのか。

3. 学際的研究課題「人口疎開」①—歴史学から学ぶ

ここで、川口朋子(2014)で提言された「学際的アプローチ」の地点に戻って考えることにしたい。まず、学際的研究とは何かについてのもっとも凡用性のある定義と思われるものを紹介する。

学際研究とは、疑問に答え、課題を解決し、単一の専門分野で適切に扱うには広範すぎるもしくは複数すぎるテーマを扱うプロセスである。より包括的な理解の構築のために知見を統合するという目的を持ち、学際研究は専門分野を利用する¹⁵⁾。

ここでの「専門分野」は現在のアカデミズムで通用されているプリンスイプルとしての「～学」のようなものを指しているが、これを川口朋子の言葉を用いて言い換えてみると、「単一の専門分野」としての「歴史学」(総力戦体制における国民動員)と「建築学」(都市空間の変容という建築や都市計画)という複数の「専門分野」の「知見を統合」することを通じて「建物疎開の実態解明」という「疑問に答え、課題を解決」するこ

11) 代表的文献としては、鶴見和子・牧瀬菊枝編(1959)『ひき裂かれて一母の戦争体験』筑摩書房、pp.146-161がある。

12) 1944年7月16日、東京都長官であった大達茂雄は急遽断行される予定の学童集団疎開に対する不安にさいなまされていた父兄に対し次のように言っている。「要するに帝都の学童疎開は、其の防空態勢の強化であり、帝都将来の国防力培養でありまして、帝都学童の戦闘配置を示すものであります」。大達茂雄(1944)『帝都学童の戦闘配置』『都政週報』第48号、東京都、p.2。

13) 東京都立教育研究所編(1997)『東京都教育史通史編4』東京都立教育研究所、pp.133-134。

14) 愛知県教育委員会(1975)『愛知県教育史通史編 近代4』愛知県教育委員会、pp.649-650。

15) アレン・F.レブコ(2013)『学際研究—プロセスと理論』九州大学出版会、p.14。

とが期待される、というふうになるだろう。では、「人口疎開の実態解明」という「疑問」「課題」のためには、どのような「学際的アプローチ」を考案すべきなのか。

安岡健一(2014)によれば、戦争末期の疎開は人・物を通じた社会全般に及ぶものであり、きわめて短期間に集中して行われた大規模の移動としての疎開に参加した人口は、1945年6月現在略770万人に至っていたという統計が存在している(もちろん、この数値には〈表1〉「閣議決定」学童疎開促進要綱」備考欄に記入した集団疎開児童40万人も含まれる)¹⁶⁾。このような戦時期の大規模な人口移動としての疎開を考えると、戦時下の民衆像に対する再考を促すだけでなく、生産と再生産をおしなべて戦争勝利という国家目標に向かって動員していく総力戦システムが、戦後にも持続されていたかどうかを考える上で非常に重要な論点を提供してくれると述べている。

この地点で、学際的研究課題として「人口疎開」と建物疎開における接点が浮上してくるのではなかろうか。「総力戦体制における国民動員」のような「歴史学」に起因する問題意識は、建物疎開に随伴するものとしての人口疎開を考察するためにも必要なのである。これは、すでに「人口疎開」という研究課題の名称自体に内包されている要素として見受けられがちではあるが、雑多な学問的要素を適当にごった混ぜにしたものを学際的研究とは呼べないのと同じく、立体性を保証する構造的体系を明確に設定することが望ましいゆえ、一度は確認しておくべきであろう。

いずれにせよ、戦争体験としての人口疎開を総合的に考察するためには、総力戦体制における国民の体験という歴史学的な見地を軸の一つにすることが要求される。ここで留意すべきなのは、学際的疎開研究において歴史学的な観点から立ち上がる主体としての「国民」というものが、例えばナショナルな政治的主体としての主権者、能動的主体としての国民たるものを指しているのではないという点

16) 安岡健一(2014) 前掲書、pp.111-113.

である。戦場と銃後との有機的な癒着・結託・結合関係に基づき社会メカニズムとしての合理性を基盤として成り立つ総力戦体制を歴史学が組上にのせる時、その体制の構成員たるものを歴史の主体として立ち上げるために「民衆」という概念を導入しているのだ。成田竜一によると、1960年代から戦後歴史学では「民衆」を主体とする歴史像が探られるようになる。これは、「政治的諸事件などは抽象的に、これまで歴史の裏側におしやられながらしかし実際には歴史をささえてきた民衆の行動は具体的に」、「人々の生活と心情の歴史を書こうとつとめた」ものであり、そこで主体として格上げされたのは「女子供」であった。これは、「する側」としての「国民」の歴史から「される側」としての「民衆」の歴史という知のシフトとしてとらえていいだろう¹⁷⁾。

無論、これは、上で言及した『ひき裂かれて』のような、戦後における生活記録運動の成果に負っている。『ひき裂かれて』はまさに総力戦体制において「される側」に置かれた「女子供」の「女」つまり母の戦争体験の記録であり、これは同時に母親から見る「子供」の戦争体験の記録でもあったのだ。「家族と別れて」章の第一「学童疎開」は、戦争体験としての学童集団疎開体験を母子がどのように味わったかを如実に語ってくれているものである¹⁸⁾。

しかし、『ひき裂かれて』のような書をもって立ち上がった歴史の主体としての「民衆」に、主体でありながら自らを「される側」(対象)のほうへ安住させてしまうことに対する自覚が欠如していた点を忘れてはならない¹⁹⁾。自分の夫と息子を皇「国民」としての志をもって戦場へ送った母たち、錬成教育を全身で引き受けてお父さんやお兄さんの後

17) 成田竜一(2010)「なぜ近現代日本の通史を学ぶのか」岩波新書編集部編「日本の近現代史をどう見るか」岩波書店、pp.233-243.

18) 鶴見和子・牧瀬菊枝編(1959) 前掲書、pp.146-161.

19) 「ひき裂かれて」における加害責任の欠如については編者の牧瀬菊枝も認めるところである。しかし、その一方でこのような欠如がきっかけとなって新たな議論が巻き起こったという事実も看過できない。戦後日本における「ひき裂かれて」の位置づけや思想的意味に関しては、佐藤泉(2006)「ひき裂かれて」岩崎稔ほか2名編「戦後思想の名著50」平凡社、pp.198-207.

を引き継ぎ死する覚悟で軍国少年・少女に自らを作り上げていく「少国民」の子供たち。このような「女子供」を歴史の主体とする民衆史が、日本列島の外部へ開かれた歴史像を発見するようになるまではもう少し時間が必要であった。

ここで、「人口疎開」研究へのアプローチを学際的に遂行しなければならないことの意味が見えてくるのではなかろうか。学童集団疎開が「順調」であったかあるいは「厳しかった」かと、その評価が二分化される理由は、自らの立ち位置に対する「民衆」としての自覚の濃度(主体と対象を両極とする軸内での立ち位置)、言い換えれば体験との距離の取り方と関係しているであろう。それは同時に、民衆の手によって書かれた生活記録のような資料・史料と、その読み手としての研究者との距離の取り方にも注意を払わねばならないことにもなるのだ。史料をテキストとして扱うこと、テキストたるものを資料・史料と照らし合わせながら読み直していく作業が、「人口疎開」に対する学際的アプローチにおいて必要であると筆者は考える。

4. 学際的研究課題「人口疎開」②—主体をめぐる格闘

資料・史料をテキストとして扱うということは、テキストとして扱われてきたものを資料・史料と照らし合わせながら読む際に何が発見されるか、という新たな地平への道標も提供してくれると考えられる。ただし、これはテキストを安易に資料・史料と同一のものとして見なすことを意味するものではない。テキスト化された資料・史料と、他のテキストとの間のどこかの地点に安住せず、絶え間なく横断する運動が必要となるだろう。

このような運動が可能になるのは、例えば当事者の立場に立脚して時局に巻き込まれていく客体としてではなく、自ら積極的に受け入れる主体としての少国民の歴史を暴き出し自分及び同世代の民衆の心情分析を試みた山中恒の仕事が存在するからである。『ボクラ少国民』シ

リーズ(全6巻、辺境社、1974-1981)を皮切りに、現在まで続けられている彼の仕事は、「される側」としての自分の立ち位置を当然視せず、それを批判的に再検討していく苦難の道りであったろう。その第4部『欲シガリマセン勝ツマデハ』(1979)²⁰は、「子どもたちの戦闘配置」(逸見勝亮)として学童集団疎開へ参加した少国民たちが単に配置させられるのではなく、自らその配置の内部におけるポジションを整備・獲得していく心理的プロセスを見事に書き残していると思われる。これを換言すれば、『ひき裂かれて』における加害者意識の欠如といった思想的課題に対する、戦時期当時の子供世代からの応答ともとらえていいだろう²¹。

「人口疎開」という研究問題を考える上で学童集団疎開研究の到達点を批判的に吸収しつつもその克服を目指していくべきであろうが、そのためには再び少国民と学童集団疎開の問題に戻って考えなければならない。山中恒の仕事が示唆するように、『ボクラ少国民』のような文献は、1960年代から台頭した民衆史研究の落とし穴を埋めるための材料を提示してくれるからである。そこには、「される側」としての純粹な「子供」などは描かれておらず、自ら「する側」となって錬成教育を積極的に受け、次世代の戦力になるために身体と精神を鍛錬していく「少国民」の姿が描かれているのである。

このような「する側」としての子供には何が見えてきたのであろうか。それが、自分を含める同世代の体験した出来事を閉ざされたものとしてではなく開かれたものとして考える、ある種の思想性を帯びる思考のプロセスによって見えてくる何かであったのは間違いない。だからこそ山中恒は以下のような問題に気づき得たのである。

20) 1931年生の山中恒は学童集団疎開該当者ではなかったゆえ、疎開体験者ではない。

21) 児童文学研究者である芹沢清実(2012)は学童の疎開を素材とした児童文学には「案外、被害者としての子供、無垢な存在としての子供が描かれておらず、積極的に戦争に加担した姿が描かれている例が多い点に注目している。そのような児童文学の書き手のほとんどは、疎開体験者あるいは同世代である。芹沢清実(2012)「体験から物語へ—学童疎開の児童文学を読みなおす」『日本児童文学』2012・9/10、日本児童文学者協会、pp.80-88。

(前略)いくつかの縁故疎開の体験記が発表された。しかし、多くは、客観性に欠けるか、もう一步のつっこみが足りない。むりもない、へたにつっこむと、家族・縁戚関係に亀裂を生じ、あとの手当てがつかないことになりかねない。そうした血縁関係というものは、以外にねばっこく、あとを引くものなのである。と同時に近親憎悪という心情増幅が作用したりする危険性がある²²⁾。

この文章は学童の疎開をめぐる縁故疎開に関する記録や回顧がそれほど見当たらず、資料・史料が出揃っている学童集団疎開に関する研究が集中的になされている現状を指摘したゆりはじめの言葉²³⁾を受けてのものである。これは単に建物疎開に随伴するものとしての「人口疎開」をとらえたものではなく、戦時期に急遽断行された都市から田舎への人口移動としての疎開の本質を鋭く突きつけた分析である。学童集団疎開参加人口数をはるかに上回る規模であったはずの縁故疎開は、「家族・縁戚関係」「血縁関係」に頼って行われた。当時実際にいかなる事態が生じていたかを知るためには当事者による「体験記」のようなものに頼るしかないが、そのような「体験記」が戦時期の粘っこくてデリケートな「血縁関係」を「客観性」を担保した上で書き残すのは無理だ、と山中恒は承知していたのである。別の言い方をすれば、縁故疎開に関する資料・史料をその読み手は一度は疑わねばならない、という点にも注意を喚起させているのである。

疎開というものが防空体制の維持・強化のために立案・実施されたものであるという点についてはすでに触れたが、「防空」とは空襲に対する防御を意味する。ここでの空襲とは、アジア・太平洋戦争の際にアメリカ軍によって主に日本内地を的にして行われた戦略爆撃のことである。二回にわたる原爆投下もこのような戦略爆撃作戦下で行われたものであるが、日本の敗戦後、占領軍は手早く戦略爆撃の効果や影響などに関する詳細な調査に着手する。そのために発足

22) 山中恒(1979) 前掲書、p.541.

23) ゆりはじめ(1972)「疎開の思想—銃後の小さな魂は何を見たか」潮出版社、pp.34-35参照。

されたのが「米軍戦略爆撃調査団」(United States Strategic Bombing Survey, USSBS)で、この調査団による報告書が「米国戦略爆撃調査団報告書」(以下、「報告書」)である。「報告書」の資料・史料的な価値についてはすでに認められているところであるが²⁴⁾、たとえば次のような記録は注目に値する。

疎開者が歓迎されたという彼らのこの一般的感想は、実際の受入れ主で疎開者を彼らの家に宿泊させた人達の証言によって支持されている。(中略)しかし、部落の土着民と、縁者でない疎開者、および彼らと一緒に暮さなかった疎開者との間に摩擦がなかったとは確信できない。

疎開者には地方の配給部を経由して食糧が与えられたのであるが、これは地方への供給を減ずることになった。地方住民の不平は増大し、彼らの食糧を奪うものとしての疎開者を非難した²⁵⁾。

このような記録の発掘と読み直しによって山中恒の指摘したような、縁故疎開の記録類における足りない「つっこみ」を取り返しようと筆者は考える²⁶⁾。アメリカ政府の命令によって作成された公式調査記録である「報告書」には、「摩擦がなかったとは確信できない」と念を押しているような書きぶりで見られ、続くところで食糧をめぐる疎開者

24) この点に関しては栗屋憲太郎(1980)「資料開題」『資料日本現代史 2』大月書店、p.439や、尾原康久(2011)「下関空襲と「銃後」の市民—米国戦略爆撃調査団・下関面接調査の分析」『地域文化研究』第26号、梅光学院大学地域文化研究所、pp.4-17などを参照。両方とも特に戦後直後の民衆意識と生活の実相を知る上での貴重な資料・史料として位置付けられている。

25) 二つとも「報告書」第4章「疎開問題」No.14「戦略爆撃が日本人の意識に及ぼした影響」。引用は東京空襲を記録する会編(1974)『東京大空襲・戦災誌 第5巻』東京空襲を記録する会、p.479、p.491。

26) 川口朋子(2014)は建物疎開の体験者が抱く「語りにくさ」、「苦勞を語ることを避ける傾向」にどう向き合うべきかという論点を今後の課題として提示している。建物疎開の体験者の中にはそれに随伴して移住させられた「人口疎開」体験者も含まれているはずであろう。川口朋子(2014) 前掲書、pp.273-274。

と受け入れ側との葛藤をほのめかしてもいるのである²⁷⁾。

疎開という事態がもたらした都市と農村の葛藤という論点に関して言えば、2000年代以後の歴史学・社会学における研究テーマの一つでもあった。たとえば、黒川みどりは疎開という事態の意味を農民がかつてのルサンチマンの対象であった「都市住民よりも、自らが優位に立った」という点から探っている²⁸⁾。都市民である疎開者と農民である受け入れ側の間の「なかったとは確信できない」葛藤は確にあったはずだが、『報告書』の記述には戦略爆撃の被害者同士にあったはずの軋轢関係まで掘り下げていくところは見当たらず、それをあえて前景化させないような抑制が感じられる²⁹⁾。山中恒が指摘している「つっこみ」が現れるためには、当事者としての自己批判をかねた「つっこみ」を行わねばならない。

5. 学際的研究課題「人口疎開」③—文学との綱渡り

学童集団疎開、建物疎開に伴う人々の移動としての人員疎開、縁故に頼って田舎に移住する縁故疎開など、戦争末期に急遽断行された「人口疎開」を戦争体験として考えるためには、その体験を語ってくれる資料・史料が当然必要である。しかし、「語りにくさ」、「つっこみ」の足りなさなど、すでに資料・史料の足りなさや既存の資料・史料の客観性・信頼性への疑念が言われているのが現状である。この難問を乗り越えるための道標はどこから見いだせるのか。

逸見勝亮(1998)は、著者の研究が解明できなかった点として都

市と農村の出会いとしての疎開をめぐる「文化史的意味」を挙げている。これは、上に言及した黒川みどりなどの問題意識との接点を持つもので、人々の移動としての疎開を考える際に必ず向かい合わねばならない壁のような領域と言っても過言ではなからう。ただし、逸見勝亮はその突破口の端緒を提供してくれてもいる。そのような「対抗」を意識的に書き残したものとして「文学」を挙げているからだ³⁰⁾。

「人口疎開」を学際的な研究方法を通じて考察するために、「文学」研究の視点を導入する地点にたどり着いたわけであるが、これは歴史学的な視座に基づいて文学テキストを資料・史料として読むアプローチを意味するのではない。大門正克は詩人吉原幸子の学童集団疎開当時の日記の読みを通じて「学童集団疎開生活に潜む矛盾はまた、相互監視や脱落への糾弾、いじめなどを生み出すことになる」³¹⁾と述べている。そのような矛盾に満ちた小国民として戦時期を潜り抜けた吉原幸子は、1947年、幼年期から書き続けてきた日記を自らやめることを決心する。それは、「演技」をやめることであったと吉原幸子は言っているが³²⁾、この点と関連して、大門は、吉原幸子における日記との決別は矛盾に満ちていた小国民としての過去の自分との決別であり、「吉原の戦後は、こうして日記をやめることから始まった」と結論づけている³³⁾。

吉原幸子は「自作の背景Ⅰ」というエッセーにおける主語を「私」ではなく「S」にし、たとえば「子どものS」が疎開の時に被った体験及び日記のことなどを語る。自ら認めているような偽りの日記は、人に読まれることを前提とした日記、つまり疎開先での引率教員による検閲が前提とされたものである。日記を書く主体が日記に書かれている主体を人為的に客体化させた営みが含まれているのである。吉原幸子は自分のことを書くのにわざわざ「S」という主体を召喚しており、だからこ

27) 板垣邦子は緻密な調査を通じて戦時期長野県における食糧をめぐる住民間の葛藤を分析している。そのような葛藤の生じた原因は、都市から急激に移入された疎開人であった。板垣邦子(2008)『日米決戦下の格差と平等—戦後信州の食糧・疎開』吉川弘文館、pp.59-85。

28) 黒川みどり(2006)「地域・疎開・配給—都市と農村再考」『日常生活の中の総力戦』岩波書店、p.33。

29) 本稿では詳しく触れないが、勝者の占領軍による敗者の被占領軍に対する調査という非対称性、という点には留意すべきであろう。

30) 逸見勝亮(1998) 前掲書、p.294。

31) 大門正克(2000)『民衆の教育経験—農村と都市の子ども』青木書店、p.215。

32) 吉原幸子(2012)『自作の背景—Ⅰ』(初出1981)『吉原幸子全詩Ⅰ』思潮社、p.378。

33) 大門正克(2000) 前掲書、p.216。

そ「全くのフィクションであるかもしれず、嘘の上塗りであるかもしれない」³⁴⁾と、自らの解説・告白の信憑性を保証していない。だとすれば、彼女の語りをひたすら資料・史料として信じきっていかどうかは危うくなると言わざるを得ない。矛盾に満ちた小国民としての日記であるからこそ、その表現と内容との距離は遊離しているかも知れないのである。大門正克の行ったような読解、彼女の日記を資料・史料として独立させて読んでいくプロセスとそこから見いだされる結論には、再考の余地があるだろう。

本稿は吉原幸子論を目的とするものではないので、詳論の展開は割愛するが、彼女の日記と「自作の背景 I」両方において最も肝心な部分は、主体による主体の客体化が施されているところである。自分と決別するために日記をやめたと告白している語り手が、書き手吉原幸子ではなく「S」に見立てられているということは、そのような営みの主体「S」をテキストの外で検閲する書き手、吉原幸子という主体が存在するというふうに、もともとは同一でありながら二つに分かれており、しかも同等の比重がおかれている主体同士のせめぎあい、テキスト全体を貫いているのである。このようなプロセスがすでに小国民としての日記にも貫かれていた点は言うまでもない³⁵⁾。二つにおける相違点は、日記の時点において受け入れられていた検閲の主体が、「自作の背景 I」においては疑わしくなったということである。要するに、吉原幸子は自我なるものの自明性を疑っているのである。

疑われる自我というテーゼと、彼女の詩作が展開された1960-1970年代との接点を探っていくためには、以下のような文章を見逃すわけ

34) 吉原幸子(2012) 前掲書、p.376.

35) 敗戦を境とする大人たちの急激な変化への疑惑を「自作に背景 I」において訴えているわけだが、総力戦体制における戦争遂行主体としての「国民」の後を受け継ぐ存在としての小「国民」であったという点からすれば、吉原幸子にとって大人世代の国民像は小国民の未来像として植え付けられていたはずであり、自(子供=小国民)と他(大人=国民)は限りなく積み重なっていたと言っている。これは、日記を検閲する大人としての引率教員が、実のところ彼女の自意識内部に抵抗なく据えられている、ということの意味する。

にはいかない。

現在を「昭和十年代」に擬する者は、彼ら自身が「昭和十年代」当時の自己との同一性を保持しており、あるいは保持していると信じたがっているのである。空疎な自己同一性を確保するために、自分がすでに実質的に変わってしまっていることすら認めようとしない。現在の特殊なわかりにくさを回避して、安易なアナロジーに頼るのもそのためだ³⁶⁾。

柄谷行人と小田切秀雄との論争の過程で「内向の世代」という作家群が命名されるわけであるが、黒井千次、高井有一、後藤明生などが彼らの創作の中で追求し続けたのが、まさしく疑わしい自我の問題であった。そのような傾向を退行的な姿勢として憂慮し詰難している小田切秀雄に対し、自己同一性が疑わしくなった時代においてはそれをめぐる格闘なしの文学はあり得ないと、「内向の世代」を擁護しているのが柄谷行人なのである。ここで大事なのはどちらに正当性があるかなどではなく、1971年という時点で文学の書き手における自己同一性をめぐる論争が展開されたこと、つまり自分の体験を小説化して誕生した作中の「私」が、実際の書き手とどこまで重なるかという問題が、批評や研究の領域からではなく、創作のほうから提出されたということであろう。

吉原幸子の自我への疑いは、このように「内向の世代」における自己同一性をめぐる格闘との類似性を見せている。大門正克は吉原の文学について「言葉とのかかわりのなかにあった幼時を回復する」³⁷⁾営みであったと述べているが、これはたとえば疎開先での母親の自殺の謎を分からないまま小説として形象化した高井有一「北の河」(『犀』、1965・4)における作者の立ち位置ともつながる問題であろう。または、学童集団疎開の際に発生したリンチ事件の被害者との不運な遭遇をきっかけに、かつての疎開体験の意味を突き付ける主人公を描いた黒

36) 柄谷行人(1971)「内面への道と外界への道(下)」『東京新聞』、4月10日。

37) 大門正克(2000) 前掲書、p.216.

井千次「時の鎖」(『新潮』、1969・12)ともつながるものであろう。高井有一と黒井千次(二人とも1932年生)は吉原幸子(1932生)と同じく学童集団疎開体験者である(ちなみに高井有一は縁故疎開も体験している)³⁸⁾。

1956年『経済白書』の「もはや戦後ではない」という標語は、戦前の経済水準を回復した日本経済は、戦後という時代の経済復興を完了したという宣言のようなものであった。以降、いわゆる高度経済成長期が満開するわけであるが、たとえば石川巧が高度経済成長期における文学を考える際の基点として取り上げているのは「内向の世代」である。高度経済成長期において「私」という主体は危ういものに転落し、外部と関わる身体・知性の物質的・精神的基盤としての「私」そのものがもろいもののように感じられるからこそ、内面を凝視する姿勢が生まれるとも言えるのである³⁹⁾。

1960-1970年代の文学における争点の一つが「内向の世代」の問題であるという点を見据えた上で、吉原幸子における自我への疑いと、黒井千次と高井有一によって小説化される少年期の疎開体験との関連性を探っていけば、そこには「自分がすでに実質的に変わってしまっている」(柄谷行人)ことに対する自覚的省察が見いだされ、さらにそのような省察の社会・時代的背景には高度経済成長期の問題がとぐるを巻いている、というところにぶつかるだろう。

要するに、都市と農村の不運な出会いと言われる「人口疎開」を既存の歴史学・社会学的なアプローチによる資料・史料の発掘・読解だけでは、そのような資料・史料が集中的に世に出されるようになった高度経済成長期という時期の問題を見逃してしまうことになる。この見逃しが致命的なのは、疎開体験者による語りをむやみに信じてしまう

38) このような論点は、シベリア抑留体験に対して「告発」しない主体を戦後日本社会へ向けて問いかけた詩人石原吉郎における戦後日本社会の意味、という議論を広げてくれる。五十嵐恵邦は、彼の詩とエッセーとの間で揺らめいている主体性の問題を、戦後日本社会における敗戦/終戦をめぐる言説の変容の問題との関連の上で論じている。五十嵐恵邦(2012)『敗戦と戦後のあいだで—遅れて帰る者たち』筑摩書房、pp.125-170。

39) 石川巧(2012)『高度経済成長期の文学』ひつじ書房、pp.8-12。

か、資料・史料の単線的な読解になりかねないからである。資料・史料に対するテキスト分析を行うと同時に、その範囲をより広範囲なものとして射程を広げていくことが必要であろう⁴⁰⁾。たとえば、歴史学者の五十嵐恵邦(2012)における石原吉郎論は、注38で記したように、既存の文学研究的な方法では見いだせなかった多様な論点を提示してくれているのだ。

6. むすびに代えて—総力戦体制と現代「リスク社会」

自我の内面を凝縮する主体の問題が、なぜ1960-1970年代の高度経済成長期及び「内向の世代」の問題とにまたがっているのかを論じるためには、戦後の高度経済システムと戦前の総力戦体制との連続性/不連続性をめぐる議論から考えねばならない。

山之内靖は、「戦争遂行国家から福祉国家へ」⁴¹⁾という研究課題がアメリカの歴史学界に登場するのは2000年前後のことで、ここでの福祉国家が成り立つための前提としての産業社会は、2000年代以後の「リスク社会」へと移行したと論じている。そして、このような移行の歴史的出発点を総力戦体制に求めている。つまり、戦前・戦中を通じて整備されていく、国家総動員体制に象徴されるような全体主義的な国家体制として合理化された総力戦体制の遺産は、そのまま戦後にもその根を張っていて戦後の経済国家としての日本、そして「一億総中流化」社会の構成員としての日本人を作り上げていく原動力として働いたと、山之内靖は指摘しているのである⁴²⁾。

40) このような試みの例としては、拙稿(2015)「津軽人」太宰治の疎開—十五年間、¹⁾やんぬる哉」を中心に、「跨境 日本語文学研究」第2号、東アジアと同時代日本語文学フォーラム×高麗大学校GLOBAL日本研究院、pp.165-177をご参照いただきたい。

41) 日本政府が疎開政策を考案する際に参考としたのはイギリスのケースであったが、イギリスにおける疎開政策の戦後への影響として、農村における「貧困層の存在」がイギリス社会へ衝撃を与え、それが戦後イギリスが福祉国家へ変貌する重大な契機となった」という点が挙げられている。イリスの会編(1993)『切りとられた時 第二次世界大戦下の学童疎開—イギリスとドイツ』阿吽社、pp.151-155。

42) 山之内靖(2015)『総力戦体制からグローバリゼーションへ』(初出2003)伊予谷登士

ここでの「リスク社会」という概念はドイツの社会学者ウルヒット・ベックから借りたものであるが、9・11の後、アメリカが主張した「自由を守るために断固たる報復を」という標語は、そこでの「自由」なるものが「恒常的な戦争準備(=社会全体の兵営化)」を要求するものであると指摘されている⁴³⁾。このような「恒常的な戦争準備」こそが戦時期日本の防空体制の核心であったという点は言うまでもないが、国家総動員軍需経済を維持するために計画されたのが工場の地方移転、つまり建物疎開であり、それに随伴する労働力の移転として計画されたのが人員疎開であった。だとしたら、戦争体験として疎開を体験し、戦後日本社会の高度経済成長を体験した人々において、その個人個人の身体には戦前・戦後の連続性・不連続性そのものが刻み込まれているのではなからうか⁴⁴⁾。

「人口疎開」を学問的課題として設定する場合、疎開が国家政策として実施されたという事実に基づいて疎開政策関連行政史料を発掘しその内容を読み砕いていくと、その中から防空体制強化という政策の目的が常に浮上してくるだけで、その目的の下で動いた/動かした個人の存在は沈殿していく恐れがある。戦争体制に向けての社会と個人の一体化といったようなものが追求され達成されたのが全体主義としての総力戦体制であったという点を視野に入れずに、経済成長に向けての社会と個人の一体化といったようなものが同じく追求され、達成された高度経済成長期という問題を直視することはできないと思う。同時に、ここでの「人口」を依然として「国民」「民衆」といった共同体的な概念によってたやすく想定してはいけなからう。なぜなら、それは資料・史料の語りをそのまま信じ込んでしまうことによって生じる危険性から目をそむけることになるからである。「国民」「民衆」のように一定の同質性が担保されている集合体を安

翁ほか2名編『総力戦体制』筑摩書房、pp.334-380。

43) 石津朋之(2013)「総力戦と社会の変化—アーサー・マーウィックの戦争観を中心に」、三宅正樹ほか3名編『総力戦の時代』中央公論新社、pp.88-95。

44) この点に関しては、高井有一における学童集団疎開の意味を論じた拙稿(2014)「学童集団疎開体験への「一証言」—高井有一「少年たちの戦場」論」『日本学報』第99輯、韓国日本学会、pp.245-258をご参照いただきたい。

易に想定せず、あくまでも個人個人の問題として緻密に掘り下げていくことが要求される、と筆者は考える。その手がかりとして、高度経済成長期の日本を批判しつつ、そのような戦後における議論の前提として「もう一つの戦前」「隠された戦前」の発見を訴えた藤田省三の思想を連想してもいいだろう⁴⁵⁾。

総力戦体制によって整えられた合理化社会が戦後日本における経済発展の原動力であり、なお現代「リスク社会」における「恒常的な戦争準備」の根元が総力戦体制に見出すことができるのであれば、総力戦体制下の戦争体験であった疎開体験を考えることの地平が、究極的には現代の問題まで広がっていることになるだろう。このことに関する考察は今後の課題としつつ、展望として、現代の問題を考えるための入り口として、学際的アプローチから「人口疎開」を考察することの意味について少し触れながら終えることにしたい。今も世界のどこかで行われているテロや空爆の問題を「リスク社会」の問題として考えることは、その「リスク」の淵源を第二次世界大戦まで遡って考えねばならない、という知の道標を提示してくれることになる。これと関連し、たとえば太宰治の戦前・戦後にまたがる疎開経験は、現代の「難民」のことを複眼的に思考するための座標を提示してくれるのではなからうか⁴⁶⁾。

参考文献

- 서기재(2012)「전쟁, 그 기억의 의미와 방법」『일본어문학』52집, 일본어문학회, pp. 209-230.
李承俊(2015)「『津軽人』太宰治の疎開—「十五年間」, 「やんぬる哉」を中心に」『跨境日本語文学研究』第2号、東アジアと同時代日本語文学フォーラム×高麗大学校GLOBAL日本研究院、pp.165-177。

45) 藤田省三(2003)「戦後の議論の前提—経験について」(初出1981)『精神史的考察』平凡社、pp.219-239。

46) 太宰治の疎開を「難民」体験としてとらえている論考に紅野謙介(2002)「難民の記憶—戦争を生きる太宰治」『国文学 解釈と教材の研究』第47巻14号、学灯社、pp.28-34がある。

- _____ (2014) 「学童集団疎開体験への「証言」—高井有一「少年たちの戦場」論」『日本学報』第99輯、韓国日本学会、pp.245-258.
- 愛知県教育委員会(1975)『愛知県教育史通史編 近代4』愛知県教育委員会、pp.649-650.
- 五十嵐恵邦(2012)『敗戦と戦後のあいだで—遅れて帰りにし者たち』筑摩書房、pp.125-170.
- 石川巧(2012)『高度経済成長期の文学』ひつじ書房、pp.8-12.
- 石津朋之(2013)『総力戦と社会の変化—アサー・マーウィックの戦争観を中心に』三宅正樹ほか3名編『総力戦の時代』中央公論新社、pp.88-95.
- 板垣邦子(2008)『日米決戦下の格差と平等—戦後信州の食糧・疎開』吉川弘文館、pp.59-85.
- イリスの会編(1993)『切りとられた時 第二次世界大戦下の学童疎開—イギリスとドイツ』阿吽社、pp.151-155.
- 宇野浩二(1972)『宇野浩二全集 第8巻』中央公論社、p.342.
- 大門正克(2000)『民衆の教育経験—農村と都市の子ども』青木書店、pp.179-232.
- 大達茂雄(1944)『帝都学童の戦闘配置』『都政週報』第48号、東京都、p.2.
- 尾原康久(2011)『下関空襲と「戦後」の市民—米国戦略爆撃調査団・下関面接調査の分析』『地域文化研究』第26号、梅光学院大学地域文化研究所、pp.4-17.
- 柄谷行人(1971)『内面への道と外界への道(下)』『東京新聞』、4月10日.
- 川口朋子(2014)『建物疎開と都市防空—「非戦災都市」京都の戦中・戦後』京都大学学術出版会、pp.1-274.
- 黒井千次(1969)『時の鎖』『新潮』第66巻12号、新潮社、pp.70-109.
- 黒川みどり(2006)『地域・疎開・配給—〈都市と農村〉再考』『日常生活の中の総力戦』岩波書店、p.33.
- 栗屋憲太郎篇(1980)『資料問題』『資料日本現代史 2』大月書店、p.439.
- 紅野謙介(2002)『難民の記憶—戦争を生きる太宰治』『国文学解釈と教材の研究』第47巻14号、学灯社、pp.28-34.
- 小林信彦(1995)『一少年の観た〈聖戦〉』筑摩書房、p.105.
- 佐藤泉(2006)『ひき裂かれて』岩崎稔ほか2名編『戦後思想の名著50』平凡社、pp.198-207.
- 芹沢清実(2012)『体験から物語へ—学童疎開の児童文学を読みなおす』『日本児童文学』2012・9/10、日本児童文学者協会、pp.80-88.
- 全国疎开学童連絡協議会編(1994)『学童疎開の記録 第4巻』大空社、pp.9-10.
- 鶴見和子・吹瀬菊枝編(1959)『ひき裂かれて—母の戦争体験』筑摩書房、pp.146-161.
- 東京空襲を記録する会編(1974)『東京大空襲・戦災誌 第5巻』東京空襲を記録する会、p.479、p.491.
- 東京都編(2005)『(復刊版)東京都戦災誌』明元社、p.177、p.210.
- 東京都立教育研究所編(1997)『東京都教育史通史編4』東京都立教育研究所、pp.133-134.
- 永井荷風(1963)『荷風全集 第23巻』岩波書店、p.419.
- 成田竜一(2010)『なぜ近現代日本の通史を学ぶのか』岩波新書編集部編『日本の近現代史をどう見るか』岩波書店、pp.233-243.
- 日本国語大辞典第二版編集委員会編(2001)『日本国語大辞典第二版 第8巻』小学館、pp.354-355.
- 藤田省三(2003)『戦後の議論の前提—経験について』『精神的考察』平凡社、pp.219-239.
- 逸見勝亮(1998)『学童集団疎開史—子どもたちの戦闘配置』大月書店、pp.5-296.
- 星田言(1994)『学童集団疎開の研究』近代文芸社、pp.5-265.

- 安岡健一(2014)『「他者」たちの農業史—在日朝鮮人・疎開者・開拓農民・海外移民』京都大学学術出版会、pp.111-113.
- 山中恒(1979)『ボクラ少国民第四部—欲シガリマセン勝ツマデハ』辺境社、pp.255-558.
- 山之内靖(2015)『総力戦体制からグローバリゼーションへ』伊予谷登士翁ほか2名編『総力戦体制』筑摩書房、pp.334-380.
- ゆりはじめ(1972)『疎開の思想—戦後の小さな魂は何を見たか』潮出版社、pp.34-35.
- 吉原幸子(2012)『自作の背景—I』『吉原幸子全詩 I』思潮社、pp.376-391.
- アレン・F.レブコ(2013)『学際研究—プロセスと理論』九州大学出版会、p.14.

<Abstract>

Opening the Horizon for the Study on Evacuation
- For an Interdisciplinary Study on “Popular Evacuation” as a
War Experience -

Lee, Seung-Jun

The purpose of this paper is to provide a direction towards a study about the evacuation in Japan during the Asia-Pacific War as an interdisciplinary work. During the war, there was a group of schoolchildren who were evacuated under the national policy of Japan. The evacuation policy was designed as part of the air defense system maintenance, and it was essential to achieve the objectives of maintaining national systems as the war system. This is why the first launch evacuated the munition factories and buildings in the local province. Thus, it was 'the evacuation of population' that must be considered in connection with the displacement of laborers as a byproduct of the displacement of industries.

In order to raise the academic issue of 'evacuation of population' as a war experience, we need to take into consideration the achievements of historical research on the evacuation of schoolchildren groups as well as recent research on the evacuation of buildings. It is necessary to study a wide range of issues from the period of rapid economic growth of Japan to 'the introverted generation.' This study presents a first step to achieve these goals.

Key words : evacuation, war experience, total war, the introverted generation, period of rapid economic growth in Japan

투 고 일 : 2016년 3월 31일

심 사 일 : 2016년 4월 18일

심사완료일 : 2016년 5월 9일